

第8章 大いなる疑惑

これまでの経緯

ここまで長々と書いてきたが、たぶん全部読んでくださった方は少ないに違いない。そこで第1章から第7章までをかいつまんで、振り返って見たい。

第1章

ブッシュ大統領の一族が3代にわたって米国政府に大きな影響を与え、石油産業を基盤としていたことから、サウジアラビアと深く繋がっていたことを述べた。

また、貿易センタービル攻撃を行ったアルカイダは、元を正せばソ連が占領したアフガニスタンを取り戻す為に、米国が育て上げたテロ組織であることを述べた。

アルカイダの中心人物ウサマ・ビン・ラディンはサウジアラビアの有数の富豪の一族の生まれでブッシュ一族と付き合いがあったのだ。

アルカイダは1990年ごろから徐々に世界でテロ事件を起こし始め、米国に敵対する存在となった。1998年頃には数名のアルカイダが米国で飛行訓練を受け、大規模のテロを計画し始めた。

第2章

2001年9月11日に、ついに4機の旅客機をハイジャックし、そのうちの2機はニューヨーク・マンハッタンの貿易センタービルに突入して3000人近くの犠牲者を出した。また、ほかの1機はペンタゴンのビルに突入して125人の犠牲者を出した。

残る1機はテロリストの意図に気づいた乗客たちが、協力してテロリストとに対抗し、機体はペンシルバニアで墜落した。

第3章

米国は反撃のための計画を作り始めた。ターゲットはアルカイダと、其れを庇うアフガニスタンの政府（タリバン）だった。

法服を実行するため米国政府は、稀代の悪法と言われる Patriot 法の制定に向かうが、良識派のリーヒー上院議員やダッシュル上院議員の反対にあう。

その状況下で政府高官はテロリストが生物兵器を使って、再び米国を襲う可能性があるかと警告した。

2001年10月2日に炭疽菌患者が発生し、2ヶ月近くにわたって患者の発生がつづき、5人の死者が出た。この炭疽菌攻撃の対象はマスメディアと政治家（ダッシュル上院議員、リーヒ上院議員）だった。

この結果、米国のみならず、世界各国が米国の報復計画に意義を唱える事はなく、国連でも米国がアフガニスタン攻撃を容認する事になった。

またその後も、米国と英国がイラクは大量破壊兵器（MDW）を保有すると言いう言い掛かりをつけて、世界がイラク攻撃を容認する道筋をつけた

第4章

アフガニスタンへ侵攻した米国・英国は、無差別な爆撃によりモスクに集う人々を含む多数の市民を殺害した。この被害者は3000~3400人に及んだと推定される。

第5章

米国で始まった炭疽菌の調査では、早くも10月25日に菌の種類が米国内で培養されていたAmes種であることが判明した。しかし、その後の調査は遅々として進まず、ハーバード大の細菌学者の失踪、ホロビッツ博士による産軍癒着の疑惑、などがあり迷走を続けていたが、2002年8月にスティーブン・ハットフィル博士が有力な容疑者として浮かんた。

第6章

クリントン大統領の生物兵器アドバイザーを務めたローゼンバーグ博士は2001年12月に、犯人像について様々な角度から指摘を行なった。なかでも炭疽菌ワクチンは市場に無く、ワクチンを入手した人物を迎れば犯人に辿り着くと指摘した。

第7章

2010年2月になり、漸くFBIが事件の総括を発表した。結論はUSAMRIIDの研究者であるブルース・イビンス博士の単独犯行であるとした。しかし、その時点ではFBIが犯人だと断定したブルース・イビンス博士は死亡していたのである。最も、有力視されていたスティーブン・ハットフィル博士はワクチン接種の事実がありながら、RMR-1029を扱える立場になかったと言う理由で調査対象から外されていた。

これらの経緯を踏まえて、FBIの結論が本当に正しかったのかを吟味する。

第一節 アメリカ防衛再建計画

ブッシュ大統領の任期は2001年1月20日から2009年1月20日であり、FBIの炭疽菌事件報告書が出されたのはその約1年後となる2010年2月19日である。

つまり、FBIの報告者はブッシュ大統領の任期中に報告を公表したくなかったのではないかと、と言う疑問が生じる。

当時炭疽菌事件の捜査に影響を与えたと思われる、主要な人物は下記の5名であった。

ラムズフェルト国防長官（2001年1月20日～2006年12月18日）、

アッシュクロフト司法長官（2001年1月20日～2005年2月3日）、

テネット中央情報局長官（1997年7月11日～2004年7月11日）

モラーFBI長官（2001年9月4日～2013年9月4日）

カード大統領首席補佐官（2001年1月20日～2006年3月28日）

まずは、それぞれの人物の背景を見ておこう。

- ラムズフェルト国防長官 (Donald Rumsfeld)
タカ派のアメリカ新保守主義 (ネオコン) 思想を持つ人が多い**アメリカ新世紀プロジェクト** (Project for the New American Century, **PNAC**) という保守系シンクタンクに属していた。また、ファイザーの子会社である G.D.Searle, LLC という会社の役員として 1977 年～1985 年の間、席を置いたことがある。

- アッシュクロフト司法長官 (John David Aschcroft)
信心深く、死刑賛成派、妊娠中絶反対派、銃規制とゲイの反対派であった。人種差別主義社であるとの非難をしばしば受けていた。

- テネット中央情報局長官
- モラーFBI 長官
- カード大統領主席補佐官

カード大統領主席補佐官が最初に生物兵器による攻撃の可能性に言及し、それに続いてラムズフェルト国防長官とアッシュクロフト司法長官が同様の警告を発した。

ブッシュ政権の政策を、理論的に支えた PNAC は 2000 年 9 月に「アメリカ防衛再建計画」を発表している。その要点は

- アメリカが地球規模での責任を遂行するための軍備、軍事支出の増強
- 民主主義諸国と同盟を結び、価値観や利益を共有しない政権との対峙
- 国外での政治的、経済的自由の大義の強化
- 国際秩序の維持拡張のためにもアメリカのみが勝ち得た唯一無比の役割を果たす

であった。

しかも、「アメリカの防衛体制は、新しい真珠湾攻撃のような破滅的な出来事抜きには、その再建のプロセスは長期間を要するものになるであろう」と述べられていた。

貿易センタービル攻撃は、まさにこの「破滅的な出来事」だった。この符合はのちに「同時多発テロ自作自演説」を生むことになる。また、炭疽菌が 9/11 以前に準備されていた可能性が高い為、この「破滅的な出来事」が一連の仕組まれた事件ではないかと言う疑いを引き起こしている。

第二節 FBI 報告の疑わしさと曖昧さ

FBI の報告は疑わしい部分が多い。2001 年 12 月には早くもローゼンバーグ博士から捜索の引き延ばしを凶っているのではないかと指摘をされた。ローゼンバーグ論文と FBI 報告書を対比させると FBI 報告書のおかしなところが明らかになる。

(ア)炭疽菌の種類と兵器化

炭疽菌の X 線顕微鏡による解析で「上院議員あての手紙に入っていた炭疽菌は特殊な形のシリカを含んでいて、イラクなどで製造された炭疽菌の特徴であるベントナイトは含まれていなかった。」ことがローゼンバーグ論文で明らかになっている。また、NPO 遺伝子研究所が、遺伝子解析を行なっていてその結果がわかれば「手紙に使われた炭疽菌が、何回複製されたか、国のプログラムのような大規模施設で作られた物か、あるいはテロリストが小規模に作ったものかがはっきりする」と指摘しているにもかかわらず、FBI 報告はその点に触れていない。

(イ)炭疽菌の出どころ

ローゼンバーグ論文では「20研究所が Ames 株を USAMRIID から譲り受けていた。しかし、その中で炭疽菌を兵器化する能力を持つ研究所は、多分4研究所にすぎない。」と指摘したにも関わらず、FBI 報告書は

- 「調査の初期段階では、手紙が他国の支援により流布されたテロなのか、国際テロ組織によるものか、国内グループによるものか、あるいは単独犯であるのかが分からなかった。初期の捜査の大半は手紙に使われた菌株の分類に費やされた。遺伝子分析が必要なためこれには時間が掛かった。」

「2007年、数年にわたる科学的な発展と遺伝子解析の進捗により、FBI 研究所と特別調査班は手紙に使われた菌株は、RMR1029 と名付けられた菌株 (Ames 株) であると判断した。」と述べている。

この結論に達するまでに何故6年間近くもかかったのか。人間の遺伝子検査では最も複雑な場合でも半年だという。ⁱ

(ウ)犯人像

ローゼンバーグ論文では「犯人は炭疽菌ワクチンを事件の直前に受けているはずである。炭疽菌を手紙に詰める操作は、非常に危険である。一方、ワクチンは市場にはほとんど無く入手が難しい。したがってワクチンを辿ってゆけば犯人に行き着く。」と指摘している。

ところが、FBI 報告では Cipro を使っていたスティーブン・ハットフィル博士を以下の説明で嫌疑者から除外した。

- ハットフィル博士は炭疽菌を手紙で流布する（この方法は生物兵器業界では一般的ではなかった）ことの難しさを十分知っていた。さらに2001年に抗菌剤 Cipro の処方箋を複数回もらっていた。だが、ハットフィル博士が当時罹患していた感染症の治療に使われたことは明らかだった。そしてハットフィル博士は RMR-

1029 を扱える状況にはなかったことが明らかになった。

一方で FBI 報告書は、イビンス博士が Cipro を服用していたかどうかについて全く触れていない。

(エ) 直接証拠

FBI 報告書ではイビンス博士が犯人である事を証拠立てようとしたが、直接証拠を得ることはできなかった。以下のような状況証拠ばかりが述べられている。

- 捜査員はイビンス博士が一人で夜遅く、あるいは週末に RMR-1029 菌の保管場所に居たことをつかんだ。しかし、このような行動は、炭疽菌入り手紙が送られるより以前及び以後には見られなくなった。
- 捜査員がイビンス博士から入手した膨大な E メールを分析すると、炭疽菌入り手紙攻撃の期間を含め、彼に精神的な問題があることがわかった。調査員は USAMRIID のコンピュータを経由する E メール及び、個人的な E メールを監視し、同時に彼の車に GPS 装置を取り付け、同僚を尋問し、定期的にゴミ箱を調べた。
- 2007 年秋までに捜査員と検察官は秘密捜査の限界に達したと判断して、マリランド州フレデリクの自宅、車、USAMRIID の事務所の捜査許可証を取った。その結果イビンス博士は自分が捜査の対象となっている事を悟った。2007 年 11 月 1 日家宅捜査が実行され、20 年間に議員やニュースメディアへ送った大量の手紙（中には 1987 年に NBC ニュースの住所へ送られた手紙）、3 挺の拳銃、2 挺のスタンガン、検知装置、コンピュータののぞき見ソフトウェア、地下の一部にある射撃場などを発見した。

さきにも述べたが、イビンス博士が Cipro を服用していたという記述はなく、この点だけでもイビンス博士犯人説を覆えずにたります。

(オ) 動機について

ローゼンバーグ論文では「犯人は炭疽菌入り手紙で誰かを殺そうとしたのでは無く、恐怖を煽り、生物兵器による戦争に注目を集めようとしたのだろう。9/11 はたまたまその絶好の機会となった。メディアを攻撃の対象に加えたのは、一般市民に生物兵器の脅威を確実に伝える役にたつと犯人が考えたためだろう。

想像ではあるが米国政府が敵に対し報復処置を取るとか、犯人が関係するプログラムへの認識を高め、資金を獲得すると言った期待があったのではないだろうか。

ダッシュル及びリーヒー上院議員をなぜ攻撃対象に選んだのか、は謎を解く糸口になるだろう。」と指摘している。

それに対して FBI 報告書は次のように述べている。

- 「イビンス博士が 20 年余りにわたって研究していた炭疽菌ワクチンの開発が失敗しつつあった。」

- 精神的障害が犯罪を犯す元になった。

最も重要な「上院議員を何故標的としたか」については、FBI 報告書は何も述べていない。

第三節 疑惑のまとめ

長々と書いてきたが、炭疽菌事件は本当にひとりの精神異常研究者が引き起こした事件なのか、という事が筆者の疑惑である。

断定することはできないが、米国政府の関係者が世論を誘導するために筋書きをつくり、犯人に指示したのではないかと筆者は思っている。

9/11 以前に既に兵器化された炭疽菌が用意されていた（推定）こと、9/11 後にすぐ政府高官が細菌兵器による攻撃を示唆した事、炭疽菌事件以後国内世論も国際世論もアフガニスタンとイラクの攻撃を許容した事、はまさに筋書きどおりに運んだ印象を受ける。

都合の良いことに精神不安定な研究者が見つかり、全ての責任をこの研究者に押し付けて自殺に追い込んだのではないだろうか。

もはや、四半世紀が経ち新たな事実や証拠が出ることはなく、誰もが黙って FBI 報告を受け入れてしまい、イビンス博士の潔白を証明しようとする者もない。

(完)

ⁱ <https://kompas.hosp.keio.ac.jp/contents/000377.html>
遺伝子検査